本番に備えて練習する達谷窟毘沙門神楽の面々

第２章

現在の達谷窟毘沙門神楽を担う12人の伝承者たち

受け継がれてきた伝統の舞い

「ダンツクダンツクダンダン」―。

毎週火曜日午後7時30分に下達谷公民館から、太鼓や鉦、神楽歌など心地良い音が聞こえてくる。神楽の演舞の練習をしているのは、達谷窟毘沙門神楽のメンバーだ。年代や地域を超えて集まっているメンバーたちは、「御神楽」や「くずし舞」など受け継がれてきた伝統の舞いを絶やさないため日々練習に励んでいる。普段のたゆまぬ努力があるからこそ、本番の舞台ではより一層力強い舞いとなり、まばゆい輝きを放つ。

「なぜ神楽を舞うのか」「神楽が持つ魅力とは」。舞台裏である普段の練習風景に迫る―。

達谷窟毘沙門神楽メンバー募集中！

神楽に興味がある人はぜひ一度見学に来てください。

▷練習日程…毎週火曜日　19:30～21:00

▷練習場所…下達谷公民館（平泉町平泉字北沖３－１）

①＿太鼓や鉦の音色に合わせ華麗に舞う（佐藤美津子さん）／②＿練習中自然と笑みがこぼれる（千葉恵美子さん）／③＿年代や地域を超えて練習に励むメンバーたち

きれいな舞いに見えるように、手の動きや足の運びなど一つ一つの所作を確認している

女性参入のきっかけとなった達谷窟毘沙門神楽

達谷窟毘沙門神楽の現在のメンバーは男性２人、女性10人の合計12人。メンバーはほぼ女性で構成されており、同神楽の代表である照井幸子さん（４区）は「達谷神楽の舞い手はかつては男性中心だったが、改称以降、メンバーは胴取り（太鼓役）の故・照井幸男さんを除いて全て女性で構成されていた。男性中心の神楽界において、女性中心に舞っている同神楽の存在はとても珍しいものだった」と発足当時を振り返る。しかし同神楽の活躍が広まると、次第に各地で女性の舞い手が増えていったという。幸子さんは「達谷窟毘沙門神楽の存在が、女性が神楽界へ参入していくきっかけになったと思う」と話す。

練習の場が、メンバー間の交流の場にもなっている

達谷窟毘沙門神楽の練習は、毎週火曜日に下達谷公民館を会場に行われており、毎回メンバーのほぼ全員が参加している。昔から同神楽を続けている佐藤美津子さん（５区）は「練習日を『毎週火曜日』ときちんと決めているため、みんなが集まってくる。そして達谷窟毘沙門神楽が長く続いてきたのは、公演前だけでなく、公演のない時期にも練習を続けてきたからだと思う。人数が集まらず演舞の練習が出来なくても、メンバー同士の世間話が楽しくて、それだけで練習に来たかいがある」と笑顔で話す。

同神楽の２０１５年の年間公演回数は15ステージ。１月２日深夜から行われる達谷窟毘沙門堂鬼儺會での「舞始め」で同神楽の一年が始まり、町内外のイベントに出演し、12月23日に毘沙門堂本尊に舞を奉納する「舞納め」で一年を終える。神楽は太鼓と鉦のリズムに、舞い手の呼吸が合ってこそ美しい演舞となる。メンバーは受け継いできた神楽をさらに磨くため、本番に備えて日々汗を流して練習に励んでいる。

神楽は特別なものではなく、日常にあるもの

海外公演にも参加したことがある千葉恵美子さん（５区）に神楽の魅力を尋ねると「神楽の最大の魅力は太鼓と鉦の音色。音を聞くだけでワクワクし、手が自然に音頭をとってしまう。南部神楽は演劇に近い部分があり、表現するためには役になりきる必要があるので、とてもやりがいがある。自分にとって神楽は特別なものではなく、日常にあるもの。家族の協力があり、これまで続けることができたのでとても感謝している」と話す。

練習後に開かれるお茶会も楽しみの一つ

interview

辰巳　浩司さん
達谷窟毘沙門神楽
（1981年生まれ・13区）

大変だからこそ、上手くできたときの喜びは大きい

神楽は中学校時代に選択教科で習いましたが、その後は続けていませんでした。しかし友達に誘われて３年ほど前からまた踊り始めました。

神楽は動き方など覚えることが多いため大変ですが、だからこそ本番の舞台で上手くできたときの喜びは大きいです。

interview

駿河　泉さん
達谷窟毘沙門神楽
（1999年生まれ・４区）

神楽はアクションが多くて、きちんとできると楽しい

神楽は幼稚園のころに地域の人たちと一緒に習っていましたが、本格的に始めたのは１年半ぐらい前からです。神楽のリズムは、最近のヒップホップなどのリズムと比べるとテンポが遅いと感じるかもしれませんが、アクションが多くて、きちんとできると楽しいです。